



NPO
法人

日本高山植物保護協会

JAFPA

2024.1.1 No.99

- 高山植物の生息脅威と当協会の活動意義
- 35年ぶりのネパールでの植物調査
- 三ツ峠観察会と保全活動体験
- 白馬八方尾根高山植物観察会
- 梨ヶ原観察会
- 本部事務局報告「アンドンマユミ調査」
- 関西支部活動報告
- 静岡支部活動報告
- 昭和大学北岳支部活動報告
- フォトコーナー
- 高山植物一口メモ



日の出の輝き、本栖湖畔にて
(写真提供：山本 義人)

高山植物の生息脅威と当協会の活動意義

事務局長：山本義人

新型コロナが5類感染症に移行したことで、従来の日常を取り戻してきているこの機会に、事務局立場で今後の活動を考えてみたいと思います。

高山植物の生息を脅かす要因はいろいろあります。まず第1に地球規模の急激な温暖化です。氷期に氷河の南下とともに日本列島に南下してきた植物が、氷期の終わりとともに高山帯に遺存しており、急激な温暖化に伴う気候異常で、高山の生態系のバランスが崩れています。これまで高山帯には生息していなかった動植物が進出してきました。植物とポリネーターの発生時期の狂いなどで受粉にも障害を生じています。当協会は温暖化を抑止する意義を訴える立場にあると思います。次に山野草ブーム以降の盗掘問題です。種の保存法や条例などによって規制されていますが、相変わらず続いています。違法採取の監視や保護活動は当協会が設立された活動の原点です。続いて、ニホンジカの食害問題です。人間の悪質な行動とは違い、採食は動物が生息していく摂理ではありますが、人間の自然との関わり方が変わったことや人間が行った開発行為など

で、ニホンジカの異常繁殖をもたらしてしまったとも言えます。行政と連携して多様な生態系を維持・回復するためニホンジカ食害対策を展開することは急務の課題です。さらに近年になってSNSの問題が生じています。撮った写真をSNS上にアップするのはそれを見せたい、見てもらいたい、仲間とつながりたいということでしょうが、写真を撮るため被写体に近づくことは、特にグループで大勢で踏み込んでしまうと、踏圧により幼芽や地中根だけでなく共生菌にダメージを与えてしまいます。また、その情報を得て悪用する人がいます。SNSはツールとして利点もあれば不都合な面もあります。SNSを利用する人が、不都合な面に十分配慮した運用を心掛ける必要があります。

当協会の活動が意義あるものであると再認識し、会を維持し次世代に繋いでいくために、各会員が新たな会員仲間を募り、活動を充実させていく体制が必要です。特に山小屋関係者や山岳ガイドといった方々との交流が大事だとも考えています。皆さんからのご提案とご協力をお願いします。



35年ぶりのネパールでの植物調査

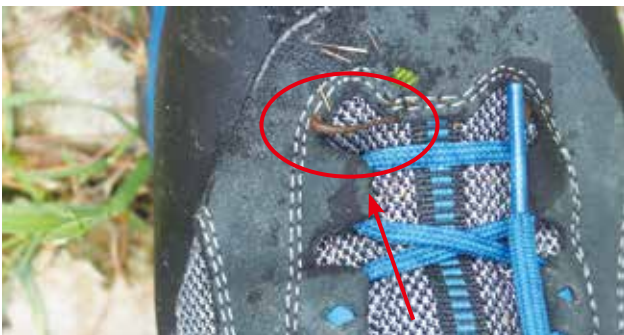
会長：岩科 司

35年ぶりのネパールだった。その当時はまだ日本からネパールに直行する飛行機はなく、タイのバンコックを経由してであった。ネパール航空の飛行機は小さく、客室乗務員の制服にはつぎあとがあった。しかし今ではカトマンドウの空港は新しく、市街地への道路も完全舗装になっていた。ところが市内に入ると、特に中心街のタメル地区では昔とほとんど変わらない町並みで、まだ馬車も見かける一方で高層ビルもあるという、まさしく日本の戦前（もちろん私は生まれていないが）と21世紀が混在する国になっていた。王政はすでに崩壊し、当時の王宮は博物館になっていた。



35年前と変わっていないカトマンドウの一角

1988年のネパールの調査はポスト・モンスーン（乾季）の9月から11月にかけてで、5千メートルを超える場所でのテント生活もあったが、今回は1週間のみで、高くても3千メートルにも満たないネパール中部付近の調査であった。モンスーン・シーズン（雨季）だったので、1週間の間にヒマラヤ山脈が顔をのぞかせたのはわずか1日の朝のみであった。しかしネパールでは、花の種類が多いのはやはり雨季なので、調査には雨具はかせない。このシーズンの調査ではいちばんの問題はヒル（ネパール語では“ズガ”という）で、



雨季には至る所に生息しているヒル(ズガ)

草むらにでも入れれば瞬く間にヒルにとりつかれてしまう。これは35年前とまったく変わらない。

今回の調査の主目的は、ヒマラヤ全体では100種類をはるかに超えるプリムラ属植物であったが、高所まで行く時間がなかったうえに、時期も悪かった。そこで急遽、調査をショウガ科の植物に変更した。最も目立ったのは、日本には分布していないロスコエア属 (*Roscoea*) の植物で、この仲間に最初に出会ったのはブータンで、当初はラン科と見間違えていた。ネパールにあったのはロスコエア・プルプレア (*R. purpurea*) という種で、5センチ前後の紫色の美しい花で、標高2千5百メートルぐらいの場所（ネパールでは低地）に自生していた。その他に、シュクシャ属 (*Hedychium*) のヘディキウム・スピカーツム (*H. spicatum*) やカウトレヤ属 (*Cautleya*) のカウトレヤ・スピカタ (*C. spicata*) などであった。他の植物としては、やはりヒマラヤには多数の種が自生しているツリフネソウ属 (*Imatiens*) やジンチョウゲ科の植物なども観察することができた。



ロスコエア・プルプレア(ショウガ科)



ヘディキウム・スピカーツム(ショウガ科)

ネパールといえば、一般には標高3千5百メートル以上に自生する“ヒマラヤの青いケシ”に代表される高山植物であるが、今回の調査では、普段あまり対象としない中高度域の植物を見ることができ、これはこれで収穫であったと考えている。



三ツ峠観察会と保全活動体験

本部長：中村光吉(三ツ峠山荘オーナー)

6月10日に参加者4人でアツモリソウ等ラン科植物の観察及び自生地の保全活動を行った。

天気もまずまずで、アツモリソウの咲き出した木無山から始めて山頂周辺を観察して廻った。「かつて山頂の草原には全部で数千個体のアツモリソウがあり、その当時は冬は寒くマイナス20度位の日も続いて、地下茎と栄養源である菌は安定された状態で保全されていたが、これらの花々がお金になると目をつけた、先ず地元の者達の大量盗掘が始まり、10年程でアツモリソウは全体の7割位は失われた。当時、長野の山野店で百万円くらいで売っていた記事もみた事がある。結果、自然界の生態系のバランスが崩れ、ササやテンニンソウ、クマイチゴ等、根は浅く早い時間で群落化する植物が優勢な状態になり、それらを人の手で除去する事で生態系のバランスをかつての様に戻す作業をしている」といったことなど、アツモリソウの生態や他の植物との関係を説明した。

アツモリソウの受粉様式でマルハナバチがいることは、三ツ峠の多くの植物にとり重要であることを伝え、テンニンソウの除去を行った。

カモメランは現在三ツ峠全体では数多くあるが、観察や写真を撮るため近くに踏み込む者がいて、地下の菌に悪影響があることも伝えた。

参加された会員の前原さんからの感想文を紹介させていただきます。

今回保護活動に参加して、食害や盗掘から守るための保護柵内の中で大きなピンク色の花を咲かせているアツモリソウを見たときは本当に感激しました。そして、その形状がマルハナバチによる受粉を助けていることやラン科植物と共生菌との関係を知ると、より愛おしく感じられました。また、アツモリソウが生育する草原の斜面には、テンニンソウ、オオバギボウシ、クサタチバナなどが生い茂っていますが、その中で繁殖力の強いテンニンソウを除草することが種の多様性を守るために大切だと分かり、除草作業にも熱が入りました。

お話の中で、「自然保護は山の上だけのことではなく、私たちが日常していることが地球上の生態系にどのように影響を及ぼしているかを、日頃から考えながら生活して行くことが大事である」という言葉が印象に残っています。アツモリソウだけを保護することではなく、長い地球の歴史の中で培われたすべての生物の生態系が守られていくことが人間にとっても大切なことであると感じました。そして、外に向かって開かれた保護活動を目指していることに共感しました。



観察会参加者、三ツ峠山荘前にて



アツモリソウ



保全作業体験



カモメラン



アオチドリ



ヒメムヨウラン



白馬八方尾根高山植物観察会

フラワーガイド及び講師：藤井 猛

7月10日(月)に八方尾根の高山植物観察会を開催させていただきましたので、その報告をさせていただきます。八方尾根は北アルプスの唐松岳からほぼ東に伸びる約7km、標高差1900Mの壮大な尾根で、四方八方を眺めることのできることから名前が付いたと云われています。八方池を含む標高2100M付近までは蛇紋岩という特殊な地質が露出し、また多雪地であり、地形的にも湿原、雪田、草原、尾根という変化に富んだ植生環境に恵まれ、湿性、中性、乾性植物などの多種多様な高山植物が豊富に見られます。山麓からはゴンドラリフトやリフトを乗り継いで標高1830Mの村営八方池山荘まで簡単に上がることができ、さらに八方池までは自然研究路が整備され、誰もが安心して気軽に展

望とお花見の両方を楽しめます。

観察会当日は曇りでした。参加していただいた皆さんは花好きでもあり、またさすがに植物に詳しく、たくさんのお花々を目の前にして質問も多くなり、遅々としてなかなか進みませんでしたが、全行程の3分の2を3時間程かけて第二ケルンまで登ってきました。ハッポウウスユキソウ、ハッポウタカネセンブリという八方尾根の固有種を見ていただいたり、ミヤマトキソウ、ユキワリソウ、ムシトリスミレ、ハクサンチドリ他多数を観察しながら楽しんでいただきました。

このケルン付近で昼食を済ませ、さあ出発という時になって嫌な風と共に暗い雲が広がり始めたので急遽下山することにしました。途中で雨が降り始め雷も鳴ってきましたが、時間の都合や安全第一ということで、皆さんにはご理解いただきました。残念ながら八方池までは行けませんでした。また別の機会に八方池までの花々を楽しんでもらえたらと思っています。



写真は左から、参加者集合写真、登山道での観察、ハッポウウスユキソウ、ハッポウタカネセンブリ

梨ヶ原観察会

実行委員：植田憲弘、雨宮和仁

富士山の裾野に広がる梨ヶ原は溶岩の上でできた東京ドーム約1000個分の広大な草原で、数多くの希少種が生育し、希少野生動植物の保護及び生物多様性の保全活動が重要なエリアの植物を観察し、併せて、外来種の侵入状況を知るため、4エリアでの植物観察を企画しました。

Aエリアではヒナノキンチャク、ヒロハノカワラサイコ等、Bエリアではヒメヒゴタイ、キクアザミ、セイタカトウヒレン等、Cエリアではムラサキセンブリ、センブリ、モリアザミ等、そして時間があれば、Dエリアでは自由行動で花散策を予定。

当日の天候は晴れ、梨ヶ原は日陰がないエリアで風は有りましたが、高齢者が多く熱中症に注意しながら「体調は如何ですか?」、「水分を取って下さい!」お声掛けをしてお花散策スタート。やはり、八方尾根観察会と同様花好きが多く中々前に進みません。2グループに分かれて花観察をしていたところ、呼吸があらくなり歩けなくなった人が出て発熱もみられ、救急車で近くの病院で診てもらおうという緊急事態が発生しました。スタッフ間で協議して参加者には観察会中止を了解してもらいました。

診断結果は新型コロナ感染ではなく、別の急性病状でした。参加者の多くが高齢者ということから、参加にあたっての健康管理について考えさせられる機会になりました。



観察風景



ヒナノキンチャク



ヒメヒゴタイ



ムラサキセンブリ



本部事務局報告「アンドンマユミ調査」

8月30日に昨年度調査に参加した渡邊隊員と共に岩科会長と今年度の調査方針を話し合いました。今年度の調査隊の編成を渡邊隊員にお願いして、昨年度調査に参加した磯野隊員と長谷川隊員、それに新たに参加する猪俣隊員を交え、今年度の調査エリアや調査方法を話し合ってもらいました。

9月16～17日に渡邊・猪俣、また10月7～10日に磯野・長谷川の二人一組で調査を行いましたので、それぞれからの報告概要を紹介します。

◆（渡邊隊員）9月の調査は、昨年度の調査地を再調査してアンドンマユミが本当になかったかどうか再確認することと、現地での情報収集を目的にしました。調査区域では発見できませんでした。

数年前にアンドンマユミらしきものを見たという方を訪問し、その後電話連絡もしましたが、今年は発見できなかったという結果でした。元村長の星氏を訪ね、アンドンマユミの発見地の情報を得ましたので、磯野・長谷川隊員に情報共有しました。

◆（磯野隊員）10月は、自生している可能性が高いと考えられる沢沿いを中心に調査しました。3日間天気が悪く雨に降られ、調査の下降点とした尾根には前日の積雪が残り、気温もかなり低下しました。時間をかけつぶさに調査したものの、ヒロハノツリバナ・オオツリバナ・コマユミ等は確認できましたが、残念ながらアンドンマユミは確認できませんでした。

あたりにはクマ・シカの足跡も見られ、滝や渡渉、また上流の林道は荒廃し落石だらけといった危険性も感じとれ、調査に入る前日の6日は突然の寒波で急変積雪がありました。

アンドンマユミを庭で保育されているお宅を再度お訪ねしたところ、「今年は庭に1株咲き、他に10株ほどの苗木があるが、年々元気がなく衰退してきている」との話でした。

自生地とされる沢沿いの地形は急峻であり、安全面からもこれ以上の探索は限られるかと思われます。

関西支部活動報告～伊吹山観察行～

関西支部長 小谷哲朗

2019年の夏以来コロナの影響で休止していた観察会でしたが、伊吹山の最近の様子を見たいと計画しました。伊吹山は地元自治体などの尽力により保護活動が成果を上げています。車で手軽に行ける山頂部でも、防鹿柵を登山道沿いに設けて、植生の復活を目指している場所があり、登山者に保護活動の必要性をアピールするのに役立っています。貴重な植物を守る活動などが地道に行われていることは、登山道を歩いている限り余り気付かないものですが、この取り組みは登山者や観光客にしっかりと認知されているように感じます。

今年の夏は「危険な暑さ」といわれるほどの猛暑となりましたが、そんな中でも17人の方に参加していただきました。まだまだコロナの心配があるということでしたが、36人乗りのトイレ付きのバスを仕立てて密にならずに行くことができました。下界の酷暑を逃れて少しは涼しく山の花を楽しんでいただけたのではないのでしょうか？

(注) フォトコーナーに花の写真を一部掲載



伊吹山山頂にて集合写真

山頂駐車場から西登山道を登り、頂上で昼食・休憩のあと、記念写真を撮り、東登山道を駐車場まで下るといったコースは例年と同じです。西登山道をしばらく行くとゲートが設置されており、これを開けて入りますが、その先でも登山道沿いに見られる植物相は貧弱です。ゲートを開けて入った先に、さらにネットで囲われた場所があり、ここだけは植生が復活しており、中と外の違いは歴然としています。防鹿柵の効果は大きいのですが、登山道の反対側のかつてシモツケソウが群生していた場所は寂しい限りです。帰途の東登山道からは鹿も何頭か確認でき、食害のひどさは相変わらずと見うけられました。



静岡支部活動報告

南アルプスの防鹿柵の維持管理に協力

静岡支部長：鶴飼一博

令和5年度も環境省、静岡県が設置する防鹿柵の維持管理に協力しました。

融雪が早かったことから、例年よりも早くから活動（ネット柵の立上げ）を開始し、10月のネットおろしまで計6回ボランティアによる防鹿柵の維持管理を行いました。

いまだにニホンジカの侵入を許していない防鹿柵内は、かつてのお花畑の状態に回復しつつあります。一方で、防鹿柵の損傷個所の補修ができなかった箇所からニホンジカの侵入を許してしまった防鹿柵内は、ゴルフ場のグリーンのような状態に戻ってしまいました。

地形や積雪深を考慮した柵を選択するとともに、ニホンジカの侵入を許さないためには維持管理がいかに重要かがはっきりしてきました。

今後も関係機関に協力し、南アルプスのお花畑の保全に努めていきたいと思えます。



三伏峠の防鹿柵の新修繕方法
(令和5年5月28日)



聖平のニッコウキスゲ群落の回復状況
(令和5年7月15日)

箱根湿性花園・仙石原湿原植物群落観察会

静岡支部事務局長：清水和夫

令和5年9月24日、支部会員5名で箱根湿性花園と仙石原湿原植物群落を訪れました。

同園では、ジョウロウホトトギスと秋草展が開催中で、数種のホトトギスをはじめ園内の山野草を観察しながら、支部会員の懇親を図りました。特に、NHK朝ドラで放送されていた「らんまん」主人公のモデルとされた牧野富太郎博士が命名されたジョウロウホトトギスが見ごろでした。

仙石原湿原植物群落は、すでにススキの穂が開き始めていて輝いており、秋の七草も兼ねた初秋の植物観察会となりました。

帰路に箱根ビジターセンターに立ち寄り自然情報の収集や植物に集まる昆虫等の展示を見学し、充実した秋の一日でした。



箱根湿性花園にて集合写真



ジョウロウホトトギス



仙石原湿原植物群落



昭和大学北岳支部活動報告

昭和大学北岳支部長 木内 祐二

新型コロナ禍による昭和大学北岳診療所を中心とする診療部活動の様々な制約がほぼ解除され、4年ぶりに本格的に北岳診療所を再開しました。

昭和大学北岳支部では、夏季の診療部活動にあわせて、北岳周辺の貴重な高山植物保護のために、北岳山荘および白根御池小屋付近での保護活動に加え、大学内外での広報、啓発活動を積極的に取り組みました。

■北岳診療所夏山活動期間（7月24日～8月13日）高山植物保護活動

①絶滅危惧種の生育地の確認と観察

本部事務局からのアドバイスをいただき、学生部員を中心に絶滅危惧種のキタダケキンポウゲ、タカネマンテマの生育地の確認と観察を行い、肩の小屋～北岳山荘～間ノ岳の登山道周辺で生育地を確認することができました。

*夏山活動期間を通じて、学生や医師が北岳山域で観察した主な高山植物を以下に示します。

タカネマンテマ、ミヤマダイコンソウ、ミヤマキンバイ、タカネピランジ、イブキトラノオ、クルマユリ、キタダケトリカブト、タカネナデシコ、ムカゴユキノシタ、シコタンソウ、ハクサンフウロ、チングルマ、ミネウスユキソウ、マルバダケブキ、タカネヤハズハハコ、タカネシオガマ、ヨツバシオガマ、アキノキリンソウ、タカネコウリンカ、ミヤマミミナグサ、トウヤクリンドウ、チシマギキョウ、イブキジャコウソウ、レンゲイワヤナギなど

(注) フォトコーナーに花の写真を一部掲載

- ②北岳山荘を中心に高山植物の保護パトロール
- ③北岳登山道のゴミ拾い
- ④高山植物保護を訴えるポスター（第12回日本高山植物保護協会昭和大学支部ポスターコンテストの入賞作品）3点を白根御池小屋と北岳山荘に掲示。

*調査・観察に参加した学生の感想を以下に紹介します。

「今回の調査で高山植物に触れるという貴重な経験ができ、企画して頂いた方々にはとても感謝しております。今回の北岳登山の最中に出会った男性は、20年前に見たタカネマンテマを忘れられず、それを見に再び北岳を目指していると言われて、珍しい高山植物を探したいという気持ちが高まったとともに、高山植物が持つ魅力を再確認できました。」

「発見したタカネマンテマは岩場に隠れるように自生していました。前をゆく団体客の方が教えてくれなければ気がつくことはなかったので、あらためて希少な高山植物を見つける難しさを実感しました。」

■高山植物とその保護活動に関する勉強会

昭和大学北岳支部と北岳診療部、昭和大学高山植物保護サークルが共催して、令和6年3月16日に対面およびオンラインで「第13回 高山植物とその保護活動に関する勉強会」の開催を予定しています。

講演者：柿嶋 聡氏（昭和大学富士山麓自然・生物研究所 講師）

講演タイトル：「植物の多様な繁殖戦略」



北岳山頂付近のタカネマンテマ



ポスターコンテストの入賞作品3点

フォトコーナー

北岳の花 (昭和大大学北岳支部提供)



シコタンソウ



タカネツメクサ



ミヤマダイコンソウ



ミヤマシシウド



チシマギキョウ



トウヤクリンドウ



ミヤマムラサキ



ミヤマオダマキ

伊吹山の花 (関西支部提供)



イブキジャコウソウ



イブキフウロ



ルリトラノオ



メタカラコウとシモツケソウ

●高山植物一口メモ イワナシ ツツジ科

分布は本州中部以北と北海道。常緑の小低木で、低く地に伏して生える。葉はやや革質の長楕円形で、長さ4~10cm、幅2~4cmと大きい。早春、枝の先に苞葉のある総状花序を出し、淡紅色の美花を数個開く。ガクは5裂し、裂片は狭卵形で尖り紅紫色。花冠は鐘形で、長さ1cm、縁は5裂する。果実は液果で白色多肉、甘く食べられる。ナシの果肉に似ているので岩梨の名がある。

牧野富太郎博士が山道でこの花を見た時、初恋の人に会ったようだとおっしゃったといひます。博士の脳裏では、透き通るような花の美しさと恋女房の寿衛さんが重なったのかも知れませんが、山路では、この花が虫に食われていて、写真のような、完全な標本のような花にはなかなか会えません。草全体が穴だらけ、葉は茶色になって、虫にも好かれるようです。

(文と写真 大内京子)



令和6年1月1日発行

特定非営利活動法人 日本高山植物保護協会

住所：〒401-0304

山梨県南都留郡富士河口湖町河口 1672

電話：055-251-6180

携帯：070-1387-5274

E-mail アドレス：info@npo-jafpa.or.jp

HP アドレス：https://npo-jafpa.or.jp

